

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32694

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02275

研究課題名(和文) 20世紀初頭における「中国」表象の受容・形成・展開についての総合的研究

研究課題名(英文) Representation of China: Its Acceptance, Formation, and Development in Early 20th Century Japan

研究代表者

篠崎 美生子 (SHINOZAKI, Mioko)

恵泉女学園大学・人文学部・教授

研究者番号：40386793

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1910～20年代における日中の人的交流のさまを、文化、教育、メディアの面から捉えた。当時の東京帝国大学で、中国最新刊の『西廂記』テキストを用いて講義が行われていた(芥川龍之介聴講ノート)ことが確認され、それが後年の梅蘭芳訪日公演(1919, 1924)による日華関係改善の試みにつながった可能性も見えた。

その一方で、各帝国大学では歴史教育を通じて中国の政治的無力と日本による支配の必然性が強調された傾向があり、“戯劇”の受容にもバイアスがかかったと言える。

反面、同時期の中国では、“戯劇”が政治諷刺の力を持ち、有効なメディアとして働いたことが確認された。

研究成果の概要(英文)： This article demonstrates research on the cultural, educational, and media exchanges between Japan and China during the 1910s and 1920s. At that time, the Imperial University of Tokyo used the newly published Chinese play “Xixiangji” as one of their textbooks. Class notes, written by Imperial University graduate Ryunosuke Akutagawa provide us with evidence that Xixiangji was taught in the University. This note argues this academic interest brought Mei-Lan Fang’s Japanese tour in 1919 and 1924. Through his visitation, the relationship between Japan and China was improved.

While every imperial University emphasized the political incapacity of China through history education and tried to rationalize Japanese conduct in their rule over China. For this reason, they chose Chinese play according to their bias. During the same time in China classical play was often biting satire about political corruption.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日中関係 近代 文学 文化 帝国大学 同文書院 メディア 戯劇

## 1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当時、一定の雑誌や新聞などのメディアを通して、ある年代の言説状況を明らかにする研究方法が広く行われていた。そうした方法が、作家イメージの形成プロセスの研究に適用されることもあった。しかし、そうした研究は主に国内メディアを対象としており、東アジア全域で人的交流が盛んとなり、文学作品や雑誌、新聞等が相互に読まれる可能性の高まった20世紀初頭の状況に対応しているとは言いがたかった。また、「教育」やその他の「芸術」が、メディア研究と結びつけて語られることも少なかった。そこで本研究では、当時の日本の知識人が、どのようにして「中国」についてのイメージを紡ぎ、それを再生産していったのかについて、「教育」「芸術、文化」「メディア」等の方面から明らかにすることに意義があると考えた。

研究代表者の篠崎(日本近代文学)は、それまでに芥川龍之介研究を通して、当時を代表する新聞、雑誌においての「芥川」イメージの形成について検討してきた。研究分担者の庄司(日本近代文学)は、昭和初年代の「円本」ブームの調査と分析を通して、出版社の読者獲得に関わるメディア戦略について成果を上げてきた。同じく研究分担者の田中(中国史)は、中国前近代の政治史研究の延長線上に、近代中国の政治戦略を検証し、民衆統治におけるメディア側の戦略について、詳細な分析を提出している。これらの成果や手法をもとに、本研究にとりかかった。

## 2. 研究の目的

目的は、20世紀初頭(とくに1910-20年代)の日本の知識人が、どのようにして「中国」表象を身につけ、それを再生産していったのかを、「教育」「芸術、文化」「メディア」の観点から明らかにしていくことである。

具体的には以下の通り。

当時の東京帝国大学において、「中国」に関するどのような教育が行われていたかを、調査、確認する。芥川龍之介聴講ノート「支那戯曲講義 塩谷温助教授」(山梨県立文学館蔵)を撮影、翻刻するとともに、長く同大学で「支那学」を担当した塩谷温がどのような講義を行ってきたか、その著書や回想記などから分析する。そのことによって、東京帝国大学の学生たちの、「中国」に関する教養の質を確認する。

同時期に東京帝国大学から清国・中華民国に留学した学生について、また清国・民国から来日した留学生や文化人、亡命者などについて、彼らがそれぞれどのような人的交流を持ち、どのような情報を発信したかを調査する。また、上海に1901年に設立された東亜同文書院(日本人対象)と、東京に1902年に設立された神田同文書院(中国人対象)の

教育内容と、卒業生の進路、動向について調査する。

村田烏江、波多野乾一など、日本人「京劇」通の果たした役割について調査する。とくに1919年、1924年の京劇俳優梅蘭芳来日公演に際し、中国“戯劇”を手がかりに日中間の橋渡しを行おうとした人々の動向と、その影響について、調査、分析する。

## 3. 研究の方法

さまざまな方面での越境を研究の方法として意識した。「日本」と「中国」の越境はもとより、「文学」研究と「メディア」研究の越境、「文学」「文化」と「歴史」の越境、あるいは、“戯劇”を「メディア」と見なした点も越境であると考えられよう。調査機関も多岐に及び、山梨県立文学館(甲府市)に多大なお力添えを得たほか、東北大学史料館(仙台市)、愛知大学東亜同文書院センター(名古屋市)、日本近代文学館(目黒区)、梅蘭芳紀念館(北京市)などの資料を参照した。

ただし、当初計画していた同時代の大手メディアである『大阪毎日新聞』『改造』などにおける言説研究は、費用と時間が足りず、一部しか行うことができなかった。

## 4. 研究成果

まず、1910年代の東京帝国大学における「中国」関連教育の例として、「芥川龍之介聴講ノート「支那戯曲講義 塩谷温助教授」」を詳細に検討することができた。このノートを所蔵する山梨県立文学館の協力を得て、資料を撮影するとともに翻刻作業を進め、途中までは共同執筆論文の形で公開済みである。この作業を通じ、芥川ら、1910年代の東京帝国大学の学生が、清国留学から帰国したばかりの教員から、中国で出版されたばかりのテキストを用いて元曲『西廂記』の講義を受けていたらしいことが確認できた。日本近代文学館所蔵の芥川龍之介旧蔵書には、このノートの内容に対応する『西廂記』が保管されており、書き込みも多数見られるからである。ただし、このようにして教授された中国に関する教養は、俗文学とは言えあくまで古典であり、塩谷温自身も留学経験がありながら、現代中国語や現代中国事情に通じた研究者ではなかったこともわかった。帝国大学で授けられた「中国」関連の教養は、このような性質を持つものであったわけである。

また、東北大学史料館に保存されている「小林好日聴講ノート「白鳥庫吉教授 東洋史」」(東京帝国大学、1920年頃か)は、この授業が西洋の歴史学を参照枠とし、堯舜禹の治世を「伝説」として退けるところからスタートしていることを示している。また同じく東北大学所管の「池田哲郎聴講ノート「矢野仁一教授 東洋史」」(京都帝国大学 1927年)も、西洋的な知の枠組みに沿って「中華

思想」を否定した上で、近代アジアにおける戦争の原因を中国の認識不足に帰す歴史観を呈している。植民地主義とも親和性の高いこのような発想は、中国で働く人材を養成しようとしていた 1910~20 年代当時の東亜同文書院のコンセプトと対照させると一層際立って見える。「上海游記」(1921)には、芥川らしき人物「私」が同文書院卒業生の仲介で上海を経巡り、上海そのものだけでなく案内人たちからカルチャーショックを受けるさまが語られているが、それは、帝国大学的な「中国」認識が相対化されかけた瞬間の表出であった可能性もあるだろう。

なお、「上海游記」には京劇に関する記述も多いが、その背景には、同文書院卒業生の勧め以外にも、大学時代に受けた中国“戯劇”の講義がいくぶんでも影響していることが想像される。とくに芥川が北京で繰り返しその上演を見たという梅蘭芳は、1919 年と 24 年に来日公演(1919 年は初めての海外公演)を果たしている。その際には、同文書院卒業生と帝国大学の学者、卒業生とが様々な形で異文化の手引きに尽力していることは興味深い。両国関係の改善のために“戯劇”が有効であるという発想においては、全く傾向の異なるエリート集団がある程度歩調をそろえたというわけである。

尤も、梅蘭芳の芸術性が当時の日本のオーディエンスに深く理解されたとは言えず、むしろ、梅蘭芳が日本で「女形」を演じることとジェンダーバイアスが重ねられ、日本の男性性(支配)と中国の女性性(被支配)の根拠として受け取られたむきさえも生じた。後年の日中戦争にまで尾を引く問題である。

一方“戯劇”は、同時代の中国においては、政治的な批評性を持つメディアのひとつとして一定の役割を果たしていた。例えば、20 世紀初頭の中国では、曹操を悪人と見做す風潮が固定化されており、それを前提に現実の政治家を曹操になぞらえるような上演のあり方がなされていたということである。おなじ“戯劇”でも、当時の「日本人」が見ると「中国人」が見るとでは、当時あっては想像以上の差異が生じていたと言えるだろう。

本研究においては、日本の知識人にとって「中国」表象がどのように形成されていったかを見ようとしてきた。それだけでも短時間に結果を出すことは難しいが、それ以上に、中国における言説生産のあり方、とくに「日本」表象の形成のあり方についても、今後の研究の幅を広げる必要があることを痛感した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

庄司 達也 『三代名作全集』考 久保田万太郎、島崎藤村の直筆資料をめぐって、

文学・語学、査読有、217 号、2016、pp144-153、

篠崎 美生子、田中 靖彦、楊 志輝、林ハイ(女偏+夙)君、庄司 達也、芥川龍之介聴講ノート「支那戯曲講義 塩谷温助教授」翻刻、恵泉女学園大学紀要、査読有、29 号、2017、pp147-180

庄司 達也、編輯者の催促に答える手紙 久米正雄「青柳隆治宛書簡」翻刻、近代文学資料研究、査読なし 2 号 2017、pp93-97

篠崎 美生子、田中 靖彦、楊志輝、林ハイ(女偏+夙)君、庄司 達也、芥川龍之介聴講ノート「支那戯曲講義 塩谷温助教授」翻刻(2)、恵泉女学園大学紀要、査読有、29 号、2018、pp187-222

〔学会発表〕(計 2 件)

篠崎 美生子、庄司 達也、田中 靖彦、日本知識人の「中国」認識 芥川龍之介を中心に(パネル発表)、日本文学研究会十五周年会国際学術研究討論会、中国・杭州師範大学、2016.8.13

篠崎 美生子、楊 志輝、林ハイ(女偏+夙)君、田中 靖彦、庄司 達也、『支那游記』をとりまく時代(庄司:『支那游記』をとりまく時代の可能性)、田中:芥川訪中期の「活孟徳」、篠崎:「日支親善」の蹉跎とジェンダーバイアス 梅蘭芳の訪日公演を手がかりに)、国際芥川龍之介学会、中国・青島海洋大学、2017.9.17

〔図書〕(計 9 件)

田中 靖彦、研文出版、中国知識人の三国志像、2015、345

倉敷市編、庄司 達也(分担執筆)他、八木書店古書出版部、倉敷市蔵 薄田泣菫宛書簡集 文化人篇、2016、272

張競・村田雄二郎編、篠崎 美生子他(編集協力)、岩波書店 日中の 120 年文芸・評論作品選 1 共和の夢 膨張の野望 1894-1924、2016、307

張競・村田雄二郎編、篠崎 美生子他(編集協力)、岩波書店、日中の 120 年文芸・評論作品選 2 敵か友か 1925-1936、2016、315

張競・村田雄二郎編、篠崎 美生子他(編集協力)、岩波書店、日中の 120 年文芸・評論作品選 3 侮中と抗日 1937-1944、2016、315

張競・村田雄二郎編、篠崎 美生子他（編集協力）岩波書店、日中の120年文芸・評論作品選 4 断交と連帯 1945-1971、2016、327

張競・村田雄二郎編、篠崎 美生子他（編集協力）岩波書店、日中の120年文芸・評論作品選 5 蜜月と軋み 1972-、346

篠崎 美生子、翰林書房、弱い「内面」の陥穽 芥川龍之介から見た日本近代文学、446

窪添 慶文編 田中 靖彦（共著）他、勉誠出版、アジア遊学 213 魏晋南北朝史のいま 2017、299

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

篠崎 美生子 (SHINOZAKI, Mioko)  
恵泉女学園大学・人文学部・教授  
研究者番号：40386793

### (2) 研究分担者

庄司 達也 (SHOJI, Tastyua)  
横浜市立大学・国際総合科学部  
・教授  
研究者番号：60275998

田中 靖彦 (TANAKA, Yasuhiko)  
恵泉女学園大学・人間社会学部  
・准教授  
研究者番号：40449111

### (3) 研究協力者

楊 志輝 (YANG, Zhuihui)  
林 ハイ (女偏+風) 君 (LIN, Peijun)